

Active Learning の理論と実践に関する一考察
LA を活用した授業実践報告 (4)

三浦真琴
竹村祐哉

1. PBL 型授業の採択あるいは継続に関する
混乱

学生が「知識」に対して active となるのは、その「知識」が彼・彼女にとっての真理・真実になる時、あるいはそれを予感できる時である。それは成果物としての知識を示されたり、与えられたりする時ではなく、知識に接近する過程にある時、あるいはこれを経た時である。この知的探検の旅において、学生は知識を静的では

なく動的なものとして、断片ではなくあらゆるもの一ことに自分自身と連関する存在として認識する。そこでは成果物としての「答え」より、出発点としての「問い」の魅力を感じ、その意味や価値についても知ることになる。ついには自ら「問い」を発見、発掘することも可能になる。かかる知の体験には PBL 型授業が好個の手法であると論者は考えている。

表 1 PBL 型授業を実施する大学数の推移

2010 年度		2010 → 2011		2011 年度		備考
◎	267	◎	130	48.7	◎	
		○	26	46.8		
		△	23			
		×	76			
		?	12			4.5
○	86	◎	10	11.6	○	70
		○	29	33.7		
		△	25			
		×	19			
		?	3			
△	95	◎	8	8.4	△	96
		○	4	4.2		
		△	39	41.1		
		×	39	41.1		
		?	5	5.3		
×	141	◎	12	8.5	×	272
		○	5	3.5		
		△	7	5.0		
		×	105	74.5		
		?	12	8.5		
?	63	◎	22	30.1	?	65
		○	6	8.2		
		△	2	2.7		
		×	33	45.2		

前号では、2011 年度のデータに基づき、過半数の大学において PBL 型の授業がなんらかの形態で実施されていることを紹介した。しかしながら、他年度のデータと比較してみると、PBL 型授業が活況を呈しているとは言えない

のではないかという印象が浮かびあがってくる。

表 1 には 2010 年度ならびに 2011 年度の両年度における PBL 型授業実施の有無等を表した。中央欄には左欄 (2010 年度) の各状況にあった大学が翌年度にどのような状況に変化したのか、

あるいは変化しなかったのかを示してある。

2010年度にPBL型授業を全学的に展開していた大学は267校あったが、2011年度には182校に減じている。このうち少なくとも二年度にわたってPBL型授業を全学展開している大学は130校であり、2010年度実施校の半数に満たない。前年にPBL型授業を全学的な規模では展開していなかったか、あるいは全く実施していなかったが、2011年度に全学展開をするようになった大学はわずかに30校しかない。ま

た、2010年度においてPBL型授業を全く実施しなかった大学が141校であるのに対し、2011年度では、ほぼ倍の272校を数えるにいたっている。

このように概観しただけでもPBL型授業は拡大というよりは縮小の傾向にあるように思われる。2年度に限られるが、この存廃の傾向を確認するために表1（就中、中央欄557校の動向）をもとに作成したのが表2である。

表2 2010-11年におけるPBL型授業の存廃傾向

区分	校数	(%)
廃止	134	24.1
縮小	74	13.3
拡大	46	8.3
維持		
PBL展開済	198	35.5
PBL未展開	105	18.9
総計	557	100.0

PBL型の授業に未着手（未展開）の大学とこれを廃止または縮小した大学とを併せると313校を数える。これは二年度間の比較が可能な大学（557校）の56.2%を占める。他方、PBL型授業を展開する現状の規模を維持している大学と実施の裾野を拡大させた大学を併せると244校（43.8%）であり、前者との間に70校（12.4%）の差がある。PBL型授業を廃止した大学は全体のほぼ4分の1を占め、その着手に逡巡する大学も全体の2割弱存在するなど、PBL型授業は活況を呈しているどころか、拡大はおろか、継続や着手を展望できない状況にあるのではないかと、少なくともこのデータに基づく限り、そのようなことが考えられる。その背景にいかなる理由や事情があるのかについては精査を待たなければならないが、現時点では少なくとも以下の三点を考えることができる。

一つはデータの取り方の問題である。返答する（返答を求めた）部署が適切であったのか、問われた大学関係者にPBL型授業に対する理解の深浅、情報の多寡などのばらつきがなかつ

たかなど、検証する必要があるかもしれない。ちなみに関西大学にはPBL型授業を実施する科目が確かに存在しているのに、『大学の實力』に示されたデータでは「PBL型授業を全く実施していない大学」に分類されていた。個別の科目に目を向ければ、PBL型授業はただいまより盛況を迎える喜ばしい予感を与えるものになるはずだとは論者の希望的観測だが、学部を調査対象のユニットにしたために、その機運を伝えることを損じてしまったきらいがある。調査方法（あるいは調査者）のさらなる改善（あるいは反省）が求められるところであろう。

二つめはPBL型授業を巡る問題や課題が浮上してきたことである。その問題の最たるものはアウトカムへの疑義である。例えばPBL型の授業は予想以上の学習効果をもたらしてはいないという分析結果、手間暇がかかる割には効果が小さいのではないかという意見がある（Norman G.R. & Schmidt H.G.(1992)、Colliver J.A.(2000)など）。そのような分析結果に耳を傾ける必要についてはこれを認めるもの

の、知識の転移ではなく、知識の獲得に至る過程の（追）体験に軸足を置く手法において、アウトカムをペーパーテストのスコアで測定することが、この手法の価値や意義を判断するに当たって適切であるか否かについて慎重であってほしい、さらなる検討を重ねてほしいという声を大にする必要があるだろう。そもそもペーパーテストで計られるのは主として知識の転移の確かさであるというのに、そこに新たな手法を持ち込みながら、知識の取得状況に関する測定

手法が以前と同じであるという矛盾が確かに存在していることを等閑視するのは何故なのか。そのことを失念してはならないはずである。前号においても触れたように、善意の教師自らの努力に専ら依存しながら、定量的な観点からアウトカムが小さい、あるいはないと評価されるのであっては、教師の負担感、徒労感がいや増しになるばかりである。このことに大学教育関係者は慎重を期さなければならない。

表3 専門分野別・学問領域別 PBLに関する論文・書籍数

分野 年	保健	工学	教育	社会科学	理学	教養	家政	人文科学	総論	芸術	農学	キャリア	対象	出版数
2000	8	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	13
2001	6	4	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	10	12
2002	8	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	9	9
2003	17	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	21	21
2004	9	3	5	-	2	-	-	-	-	-	-	-	20	22
2005	8	16	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	27	28
2006	12	3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	19
2007	20	7	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	32	34
2008	8	6	2	4	1	1	-	-	-	-	-	-	22	29
2009	17	8	3	1	0	1	-	-	-	-	-	-	30	37
2010	8	4	-	1	3	1	-	-	-	-	-	-	17	27
2011	11	5	4	2	2	1	1	1	2	1	1	-	31	36
2012	10	9	1	2	-	-	2	1	-	-	-	1	26	29
合計	142	70	25	11	8	4	3	3	2	1	1	1	271	316

※データはNDL-OPACによる(2012年9月29日まで)。“Problem based learning”をキーワードに検索をかけた結果をもとに高等教育機関に関するものを「対象」としてカウント。なお、海外の情報でも国内向けに翻訳されたものは含む。

三つめは、学問領域や専門分野によってPBL型授業に関する知見や情報の蓄積に大きな開き、差異があることである。表3にはPBLに関する論文や書籍を主たる専門分野あるいは領域別に分類した。蓄積が豊かな医療系分野では、先に指摘した課題を克服するために新たな工夫の試みがなされている¹⁾。他方、蓄積が十分であるとはいえない分野ではPBL型授業の意義や価値について否定的な評価、判断がなされることがある、少なくとも積極的な評価がなされる

には時間と努力を要すると推測するのもあながち不当なことではないと思われる。

しかしながら論者自身は、PBL型授業が万能ではなく、そこに課題あることを認めながらも、殊に初年次学生を対象とした科目においては有効、有用な手法であると、その可能性を信ずるものである。その印象は論者の実践経験に基づいている。

小人数グループでのワークを中心に、知識への接近プロセスを体験するPBLでは、課題(問

い) の成立の可否をグループメンバーの合意によって、すなわち社会性・公共性に鑑みて決定することができる。その課題を探究するに当たってはメンバーと役割を分担したり、議論や思索を重ねたりすることによって、知的プロセスを共有する。ここでグループメンバー間に共通感覚が芽生える。さらには「問い」と「答え」をパッケージとして受け取るのではなく、「問い」を深めることによって次第に「答え」に近づいていく体験をすることによって、知の獲得を実践的に感知することができる。このような共通感覚ならびに実践感覚は中村(1992)のいう『臨床の知』に近いものであるのかもしれない。少なくともその獲得の営為について当事者ではないことを暗黙の前提とした『科学の知』とは対極にあるものだと論者は捉えている。これは、あるいは Sfard(1998)のいう“Participation Metaphor”とリンクする部分が大きいと考えられることもできる。いずれにしても“my version of knowledge”を獲得するために必要な環境であり、条件であり、意識であり、心構えであると言ってよい。

前号では小規模クラスにおいて **guiding questions** を用いずに展開する PBL 型授業の実践について報告した。答えだけでなく問いをも発見すること、すなわち「問いを学ぶ」ことが高校を卒業するまでに擦り込まれた学習スタイルを刷新することに有用であり、大学における学問のスタートにふさわしいと考えて展開した授業実践では、論者なりの手応えを感じているが、今号ではこれをサイズの大きなクラスに援用した事例について報告する。

2. 大規模ならびに中規模クラスにおける PBL 型授業の展開

『大学教育論』は今年度で開講 4 期目を迎える全学共通科目である。期を重ねるにつれて方法やコンテンツには少しずつ手を加えているが、

基本的なコンセプトは変わらない。大学の起源に言及し、現在に至るまで大学がおかした二つの大きな過ちを説明し、原点とも言うべきボローニャ・モデルへの回帰、すなわち「学生中心の大学」の再構築に向けて大きなうねりが生じていることに触れた上で、日本ではまだ顕著となっていないこの動きを自らの大学から始めよう、その中心となるのは学生であるあなたたちだと呼び掛ける。それがこの科目のサブタイトル「大学の主人公は君たちだ!」である。しかし、この呼び掛けに対する受講生の最初の反応には「(〇〇を) ~してほしい」という受動的なもの、あなたまかせのスタンス、さらに言うならば当事者意識の欠落ばかりが目立つ。かかる受講生の意識と科目のコンセプトの懸隔を埋めるために当該授業科目ではグループワークを活用する。教師からの指示や知識の提供を待つのではなく、学生が自ら動かなくては何も始まらないし、何も生まれないことを知るためにはパーソナルワークよりはグループワークに利があると考えられるからである(グルーピングにはいくつかの工夫を凝らしているが、そのことについての報告は他日を期したい)。このグループワークのファシリテーションは LA の活動に多くを負っている。LA がいなければこの科目を PBL 型授業として展開することは極めて困難、否、ほぼ不可能であると言ってよい。論者は現任校に着任して以来、小人数クラスを舞台とする複数の科目で PBL 型の授業を手がけてきたが、そのクオリティを高めてくれるのが LA である。その LA が適正数あれば中規模あるいは大規模クラスでも PBL 型の授業を円滑に運営することができると考えて実践に臨んでいる。以下の実践報告は LA の活動報告としての意味合いも含んでいる。

当初(受講申請確定前)の受講生が 400 人近くを数えた初年度は 4 名のメンバーからなるグループを約 100 組編成した後、ミラーリングを用いた自己紹介などでアイスブレイクをおこな

い、グループワークに入った。既習者がいないため LA 不在のまま授業が進んだが、教師一人では 100 ものグループのワークに目が行き届かず、LA の配置を願い出た。ここに履修登録をせずに受講していた学生一名のボランティアを得て、三名が教室の中を走り回りながらグループワークのファシリテーションを試みる授業が始まる。決して十分なファシリテーションではなかったが、毎時間、ファシリテーターとして関わることができないグループが必ず発生することを勘案して、いくつかの工夫を試みた。その一つがテーマの選定ならびに修正に関するものである。この発想は小人数クラスで展開する PBL 型授業（『スタディスキルゼミ（課題探求）：前号で紹介済み』と同じである。

テーマは各グループにおいて、それぞれに検討の上、設定することにした。検討の結果、たどり着いた複数の候補を教室で公表した後、他の学生（グループ）の反応を斟酌して、テーマの見直しあるいはその意義の再確認をする。このようにテーマはその候補を教師が示すこと一切なく、学生が決める。学生が自ら「問い」を発見することにより、授業の主体者、知の冒険者として育つという意味があると考えているからである。テーマ（問い）を自ら発見・発掘しなければグループの作業が進まないことを理解すれば、受講生の姿勢・態度は少しずつではあるが変化する。

テーマを決定したグループはその実現に向けた案を練り、企画書を書き上げる。その企画はプレゼンテーションによって公表することを前提にしてあるが、時間に制約があるため、100 近いグループの全てがプレゼンテーションの機会を得ることはない。企画書の完成度、あるいは企画の斬新さ、一見しただけではわからない奥深さなどを勘案して、科目担当者が発表チームを選ぶことにした。しかしながら、その選にもれてもなお発表の意志・意欲を示すチームには機会を与えることにした。実際にはいくつも

のグループがプレゼンテーションを希望し、一グループ当たりの発表時間を短縮することによってその希望をかなえることになったが、それだけ学生たちの取り組みが真剣であり、充実したものであったとあってよい。先に述べたように LA とボランティアそして教員の都合三名で全てのグループに対応するのは困難であったが、受講生の多くはそのことを理解し、辛抱強く待ってくれた。真摯な姿勢あればこそその理解であり、辛抱であったと思う。この年度は教室の形状もグループワークには不適切なものであり、つまりグループワークにとって不向きな環境しか用意されなかったが、終盤のプレゼンテーションには耳目を傾けるべきものがいくつもあった。学生のレポートには、プレゼンテーションの機会を全グループに与えてほしいこと、そのためには受講者数のある程度、制限することもやむなしとしてもよいのではないかというリクエストや意見が散見された。これが次年度の課題となる。

2010 年度には PBL 型授業を実施するのに適切な教室を要望し、教室の収容人員を受講者数の上限とした。また、LA も増員して、アメニティはかなり改善された。最終的な受講生は 113 名、LA は 5 名である。この期には毎回の小レポートに加えてルーブリックとポートフォリオを採用し、パーソナルワークならびにグループワークの進捗状況を各々が確認・共有できるようにした。終盤には全てのチームが取り組んだテーマについての調査・研究成果を報告する機会を得て、前年に一部の学生が不満とした機会の不公平感も払拭された。しかしプレゼンテーションを終えたチームの中には、その翌週から授業に来なくなるメンバーが散見され、また、企画自体が画一的あるいは画一的であるとの誹りを免れないものも僅かながらあった。ポートフォリオがうまく活用されていなかったこと、ならびにグループ間の情報交換と共有が不十分であったことがその一因であると考え、こ

れを克服することを次年度の課題とした。

2011 年度は机と椅子が可動式の教室を確保したものの、最大規模の教室を利用することができなかつたため、受講者数は 67 名に制限された。しかし、そこに 6 名の LA を配したので、従来に比してかなり充実したサポートができる布陣となった。授業では教師からの指示や知識の提供に学生が依存する姿勢を持たないようにと考えて科目担当者のインストラクションの回数を減らし、グループワークの時間を長く取るようにした。毎回の小レポートについては、これを科目担当者がワードプロセッサで打ち直し、そこにコメントを付したものを『大学教育論の広場』と称して、次回の授業の冒頭に受講生に配付した。このことによって受講生がどのような意見や考え、感想を持っているかをお互いに知ることができるようになり、やがてクラスの中に（少なくともグループの中に）一体感のようなものが芽生え始めてくる。それでも序盤においては自らが大学の主人公であるという意識はなかなか高まらず、それぞれのグループにおいてテーマの候補となるのは創造というよりは改善、改善というよりは不満の色彩が濃いものであり、誰かにその不満を解消してほしいという姿勢が目立った。これを払拭するために、新たに学生の登壇を企画することにした。

登壇を依頼したのは、科目提案委員会学生委員、ピアサポータ、LA である。主体的、積極的に活動していると科目担当者が判断した活動グループに所属する学生の面々である。これとは別に受講生ではない学生から登壇の申し込みがあった。その学生は受講の登録をせずに本科目に出席している学生の知人で、学外の NPO 法人組織に所属しており、そこで多くの学生が自発的に活動していることを紹介してくれた。学生の活動を紹介した回の残りの時間はグループワークに充てるが、このように主体的、能動的に活動している学生の事例を複数知ることによって、すこしずつではあるが受講生に変化が

現れた。既にグループで取り組むテーマはかなり絞り込まれていたが、そのテーマを「我が事」として認識しなおし、企画を見直し、自分たちの言葉で表現できるようになっていった。前年度に導入を試みたルーブリックとポートフォリオについては、受講生との通信（『大学教育論の広場』）を充実させ、また主体的に活動している学生の登壇を新たに設けることで、前年度の不足分を補えると判断し、当年度は用いなかった。

LA が上手にファシリテートしたおかげでグループ内のディスカッションは回を追うごとに熱を帯び、図書館や IT センターを利用するのみならず、学内の諸部署や他大学から情報を得るなど積極的な調査活動が見られるようになった。このように学生が自らテーマを選び、調査し、思考を重ねた成果はいずれもクオリティが高く、その発表は受講生ばかりか LA と科目担当者の耳目を惹きつけるに十分であった。

授業評価アンケートによると、2011 年度はグループワークに満足感を覚えた受講生が最も多く（自由記述回答 45 件中 23 件：APPENDIX I 中、2, 3, 4, 6, 8, 10, 13, 17, 20, 23, 25, 26, 27, 29, 34, 35, 36, 40, 41, 42, 43, 44）、ついで自らが主体的に授業（作り）に関わることに満足した受講生が多かった（14 件：APPENDIX I 中、2, 3, 5, 7, 18, 20, 24, 25, 26, 27, 31, 38, 41, 45）。

他方、不満について記述されていたのは出席に関することであったが（同 28, 34）、この 2 名の学生は「出欠をとらない」ことの意味—授業には出席することではなく参加することに意味がある。したがって出席点は考慮しない。欠席は問題外であるが、出席さえしていればよいということではない、という意味—を勘違いしていた。次年度にはこのことに関する誤解が生じないようにしなければならない。他にはグルーピングに対する不満が 1 件（同 9）あったが、このことにも配慮する必要がある。

提案もしくは要望にも配慮すべきものが見られた。「グループワークの時間がもっとほし

い」(同 19) という要望については、学生による登壇を開始した時期が期中盤と遅かったため、自分たちのテーマの探求がなかなか佳境に入っていけないもどかしさがあったものと判断し、翌年度には学生による登壇を早い時期に設定することにした。「facebook や twitter などの SNS を活用してはどうか」(同 12) については、論者に経験のないことではあったが、検討することにし、翌年度の中盤以降に実現をみることになる。

「科目担当者の話をもっと聞きたかった」(同 21, 37) については、論者が自ら話す時間を制限したことによるものと思われるが、教師によるさらなる話を聞きたいと感じるほど、グループワークを通しての課題探求が知的刺激に満ちたものであったのだと前向きに捉えたい。

この他、最後の授業時間において、例えば学生が自ら設定するテーマとは別に教師がグループ数よりも少ないテーマ候補を示し、複数のグループが同じテーマを扱うコンペ形式のような課題探求とプレゼンテーションがあってもおもしろいかもしいと新しいスタイルを提案したところ、これに賛同する意見があった(同 11)。しかしながら、期のはじめから教師がテーマを例示すると、それが学生達の自由な課題設定を妨げることになる懸念がぬぐえないので、次年度にこれを採用することは見送った。

受講生がグループワークや、自らが主体的に考え、動くことの意義と価値を十分に感得していたことについては、これを継続するために、翌年度も基本的に 2011 年度の方法を踏襲することにした。他方、不満についてはこれを払拭し、要望については可能な限り応えることを念頭に置いて、翌年度の授業に臨んだ。

2012 年度は前年度と同様、机と椅子が可動式の教室のうち最大規模のものを確保できなかったため、受講者数は制限され、最終的には 55 名となった。前年度から引き継いだのは、グループサイズ(1 グループ当たり 4 名)、受講生以

外の学生による登壇、学生自らによるテーマ設定、受講者と科目担当者のコミュニケーションチャンネルの一つとしての通信『大学教育論の広場』の毎号発行である。

学生による登壇は前年度に開始時期が遅かったためにグループワークに十分な時間が取れなかったという意見が寄せられたことに鑑み、第三回目から開始し、前年度より登壇数を多くした。第三回目が LA による発表、第四回目が THINK×ACT による自分史年表作り、第五回目が Lin:KU の紹介および科目提案委員会学生委員によるプレゼンテーションとワーク、第六回目が LecKU、第七回目が Muster-Peace によるプレゼンテーションとワークである。いずれの回も受講生には好評で、学生が大学の、何より大学生活の主人公であるということを次第に強く意識するようになっていった。各グループによるテーマ設定や調査に関する議論・検討は既に四回(第二・三・六・七回の学生による登壇のあとに)おこなったが、これをさらに充実させるために 90 分をフルにグループワークに使える授業時間を第八回目から第十回目までの三回に充てることにした。

学生による課題探求ならびにそのプレゼンテーションは確かな手応えを感じた前年度にひけをとらないほど充実していた。プレゼンテーションを終えたグループ(この時期にはグループではなくチームと呼ぶことにしてある)が、他のチームのプレゼンテーションにコミットしなかったり、その授業回に欠席したりすることが懸念されたが、プレゼンテーション後にグループディスカッションの時間を設定し、そこでプレゼンテーションに対する質問や意見、感想をまとめることにしたので、盛り上がった機運が衰微することはなかった。なお、プレゼンテーション後のグループディスカッションは LA からの発案である。

授業評価アンケートにおいては、自由記述回答 34 件のうち、主体性を感じることができた

ことへの満足感を示すものが 19 件 (APPENDIX II 1, 3, 4, 6, 7, 8, 9, 11, 13, 14, 18, 20, 21, 22, 25, 28, 29, 31, 33)、グループワークに対する満足を表したものが 16 件 (同 2, 4, 5, 9, 10, 12, 14, 19, 20, 21, 23, 24, 25, 27, 30, 32) あった。2 年度に亘って実践した内容と方法は、概ね受講生に理解され、受容されていると考えてよいだろう。以後も、これを基準として継続し、必要に応じてさらなる改善を施していきたいと考えている。

3. LA の成長

2011 年度及び 2012 年度のいずれにおいても LA に対する受講生の評価は好意的であり、肯定的であった (APPENDIX I : 4, 27, 28, 33, 39, 42 及び APPENDIX II : 6, 8, 12, 17, 19, 32)。科目担当者から見ても LA の活動は賞賛に値すると評価している。この科目に限らず、論者は自身の担当する科目に配属された LA に対しては同様の評価をしている。LA は年に数回しか開催されない研修ではなく、主として授業における活動、すなわち OJT を通じて成長していく。OJT は LA の成長にとって欠くべからざるファクターであるので、これをさらに有益なものにするべく、多くの教員は LA と授業前後の打ち合わせ・反省会を執り行っている。しかしながら論者はそのような授業前後の打ち合わせやリフレクションは原則としておこなわない。打ち合わせによって授業者の意図を傳達してしまうと、LA がそれにしたがうばかりとなり、自ら考えたり、工夫したりする機会が奪われることになるし、省察はリフレクション・ペーパーに反映されることで十分であると考えてのことである。受講生にとってラーニング・モデルとなるべき LA が、科目担当者の指示にしたがって自らの行動を決めてしまうのは、**active learning** の浸透を願っている立場からは首肯できないことである。現に打ち合わせがなされ

なくとも、彼ら彼女たちは自らの行動に必要な事柄を真摯に選定し、時に検討を重ね、それをお互いに共有し、授業の現場において、それを遺憾なく発揮している。少なくとも論者の担当する授業科目においては LA との授業前後の打ち合わせや反省会については、その必要を現時点では認めていない。そのような、いわばレッセ・フェールのスタンスを LA のほとんどは理解し、受容してくれて、それぞれに知恵を絞り、意見や情報を交換し、さらにそれを共有して、授業をよりよいものにするべく活動と思索を重ねてくれている。

LA が主として授業における活動を通じて成長していく様子については稿を改めて報告することにして、今号では『大学教育論』を複数期にわたって担当し、自ら成長を遂げたばかりか、科目のよりよい展開に尽力してくれた LA (竹村祐哉君) について報告しておきたい。その報告に当たっては、LA が作成したリフレクション・ペーパーを読みやすいように編集したものを掲載する (APPENDIX III)。なお、当該 LA は授業期間中に教育実習などがあったために、授業に参加していない回があるが、それでもなお、彼のリフレクション・ペーパーには注目すべき事柄が記載されている。以下、そのペーパーに対するコメントを付していく。

LA は自身の活動に留意するのはもちろん、受講生の動静にも気を配るが、他の LA の様子までも視野に入れられる者はさほど多くはない。教室全体に目を配ることの中には他の LA の動きを把握し、あるいは予測することも含まれる。竹村 LA は、自身の活動や受講生の動静のみならず、他の LA の様子も冷静に観察しており、役割分担やそのバトンタッチにも気を配っている。それは今までの自身の反省に基づいた所作であるが、それを少しずつでも実現しようとする静かでありながら確かな決意が素晴らしいと論者は評価する (第 2 回授業 Reflection Paper より : 以下、RP と略記)。

また、氏はモデル・プレゼンテーションの場で自らの体験や考えを開陳するのに精一杯である LA が多い中、その話を聞いている受講生とのキャッチボール、interaction に気を配っている（気を配ろうとしている）が、その姿勢に、彼のセンスと、そのセンスに甘んじない努力を感じる（第3回 RP）。

第4回目の授業は、学生による自発的・主体的なユニット“THINK×ACT”（関西大学広報部公認の組織）による創作である。今までに論者の担当するクラスで複数回「自分史制作の授業」をデザインし、実践してきた。彼ら彼女たちのねらい・コンセプトと、論者の担当する科目のねらい・コンセプトとのマリアージュは主として科目担当者にゆだねられるが、そのような制約あるなかで“THINK×ACT”のメンバーは初対面の受講生を上手に惹きつけてひとつの授業を創り上げていく。それは今までの大学教育論の学生登壇のコーナーにはなかったパターンであるが、竹村 LA はそのことを即座に読み取り、自らの立ち位置を探り当てている。自らのポジションを見つけられたからこそ、深い省察ができていると評価したい（第4回 RP）。

今期（2012年度秋学期）の授業においては、今までに比べて多くの学生（団体・組織）に登壇してもらったが、請われて（あるいは自ら志願して）登壇する学生に不安や緊張があることを見抜き、それをさりげなく緩和しようとする配慮している。そればかりかそのことに気づけないでいる新米 LA にも心を配っている。そこまでの成長があるのに、自らにさらにトレーニングを課し、そのトレーニングの成果を確認する心構えのあるのは、まさに「賞賛に値する」と論者は評価する（第5回 RP）。

LA の全員が論者の担当する科目のコンセプトや教育理念を理解しているわけではない（論者の担当する科目をひとつも受講したことのない LA も時間割の都合などの事情により配置されているからである）。したがって、科目担当者

の本音としては、LA が自発的にありとあらゆることを決定していくことには不安を禁じ得ない側面がある。しかしながら竹村 LA は、LA による意志決定の意義・重要性を十二分に理解し、その意義が損なわれることがないように科目担当者に LA の合議の予想される方向をあらかじめ報告し、科目担当者の理解を取り付けている。そこまでのリーダーシップを持ちながら、なお、自身にとっての課題を探し、次の行動目標に据えている（第6回 RP）。

登壇した学生によるプレゼンテーションの時間は、あらかじめ設定はしてあるが、その時の教室の状態に応じて延長あるいは短縮の必要が生じる。それは経験ある者にしか分からない感覚であるが、竹村 LA はプレゼンテーションの時間枠の変更が必要であると判断して科目担当者に相談をしてきた。そのような気づきも LA にとって必要な任務の一つであると再認識をしたばかりか、それをさりげなく後輩 LA に伝えているところが秀逸であると論者は判断する（第7回 RP）。

竹村 LA は授業開始前から LA としての作業を開始している。例えば、科目担当者からの指示がある前に、当日の授業の大まかな流れや、各グループが何処で調査作業をするのかなどの情報を受講生に示すために可動式のホワイトボードに記載し、注意を促している。さらに、先述したように教室全体を見渡す視線を常に忘れることがない。今期は LA の人員が豊富にあったので、一人の LA が一授業時間当たり多くとも2グループを担当すればファシリテーションがつつがなく進むはずであったが、彼は可能な限り教室全体の状況を把握するために、あるいは LA とグループとの関係が固定されてしまうことがないように配慮していた。しかし、その立ち居振る舞いは他の LA にとってプレッシャーを感じさせるものではなく、ごく自然なものであった（第8回 RP）。

LA の名誉のために付言しておくが、科目担

当者から LA に対して出される指示は、通常、確認レベルのものでしかない。LA の自発的な気づきあることを信じ、守りたいと願っているからである。しかし、竹村 LA はそれさえも自らの不備との省察をしている。プレゼンテーションの執り行われる授業において竹村 LA はしばしば司会を担当しているが、自己の役割のみならず、他の LA が担当する各種の役割とを視野に入れて、常にチームワークを考えている。そのチームワークの中で司会としてのミッションを自分なりに定義しているが、それはいかにも正しいと科目担当者は考える(第 11 回 RP)。

ここに至るまで、竹村 LA には自らに省察することがあり、それを乗り越えたいと願う気持ちがあることを記してきたが、それを優先させることなく、後進に司会などの業務を任せている。それは、受講生に LA として示すべき姿勢に対する意識が高いことの現れである。彼は受講生のみならず、後進の LA にも範を示している(第 12 回 RP)。

前期までプレゼンテーション後の受講生の反応の低さ(より具体的にはコミットメントの不十分なること)がこの科目における課題の一つとなっていた。これを克服するべく竹村 LA が提案したのが、プレゼンテーション後に書くグループでディスカッションを執り行うことであった。経験ある教師も心を悩ませる場面であるが、あるグループによるプレゼンテーションと、プレゼンテーションをおこなっていないグループとの間に架橋をしようとする姿勢は評価すべきことである。プレゼンテーション直後に質問を求めるのではなく、質問すべき内容・項目をグループ(チーム)として提出するという発想は、「質疑応答」というフレームワーク、スキーマを見事に乗り越えたものである。論者は他の科目においても、この発想を活かそうと考えている(第 13 回 RP)。

学生登壇社と同じく発表者にも細やかな心配りがなされているが、そればかりか、プレゼン

テーションを見聞きしても学生が質問や意見を出せないことを意欲や姿勢に原因ありと安易に括ることをせず、その理由を探り、解決策を見いだそうとしている。それがプレゼンテーション後のグループディスカッションのアイデアに結びついたのである。LA としてグループワークのみならず、受講生の学習にどのように関わるのか、如何にしてそれをファシリテートするのがよいのか、そのことについて常に考え、発見をしようと努力し、工夫を試みようとしている(第 14 回 RP)。

そのアイデアは竹村 LA の発想に基づくものであるが、他の LA との協力関係を常に意識している。グループワークをサポートすることによって受講生と LA の間にラポールが形成されていくが、今期はプレゼンテーションが執り行われる授業回を盛り上げるために、LA が互いにアイデアを出し合ったり、役割分担を明確にしたりするように働きかけていた。その結果、LA の間にも強いラポールが形作られ、チームとしてのまとまりが以前に比して明らかに強く見られるようになった(第 15 回 RP)。

これは、もとより科目担当者の願うところであったが、担当者はこのことを文言で伝えることをせず、LA 自らが気付くのを待っていた。氏はこの願いに応えてくれたことになる。次年度は授業の冒頭より、そのような働きかけをする心づもりであるというので、大いに期待している。

以上、LA のリフレクション・ペーパーを紹介しながら、それぞれに簡単なコメントを付してきた。この LA の活動は受講生にとってのラーニング・モデルになるばかりか、他の LA にとってのモデルにもなっている。年に二回ほど開催されている研修は授業とは切り離された場所・文脈で実施される。そこではファシリテーションに必要なスキルなどを修得したり、磨いたりすることが主たる目的となっている。その

研修にはもちろん意義があるが、今号で紹介した授業場面における相互研鑽、すなわち OJT こそが LA の成長につながっているのである。科目担当者であり、LA の活用者である教師は、そのことを銘記した上で、受講生の active learning のみならず、LA の active learning にも配慮する必要がある。

註

1 例えば東京女子医科大学では学生が自ら問題を発見できるように導く「改良型 PBL」が導入されている。国外では、オランダのマーストリヒト大学で PBL 学習チームが編成され、ニューメキシコ大学では学習者コミュニティが形成され、それぞれ学生の自主的・主体的・責任のある学習が促進されるように配慮されている。

参考文献

中村雄二郎 1992 『臨床の知とは何か』岩波新書

Sfard, A., 1998 “On two metaphors for learning and the danger of choosing just one,” *Educational Researcher*, 27, pp.4-13

Norman G. R. and Schmidt H. G. 1992 The psychological basis of problem-based learning: a review of the evidence. *Academic Medicine: journal of the Association of American Medical Colleges*, Sep. 67(9) pp.557-65

Colliver J. A. 2000 Effectiveness of problem-based learning curricula research and theory. *Academic Medicine*, Mar. 75(3) pp.259-66

B.マジュンダ、竹尾恵子 2004 『PBL のすすめー「教えられる学習」から「自ら解決する学習」へー』、学習研究社

先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム
拠点間教材等洗練事業 PBL 教材洗練 WG
『PBL(Project Based Learning)型授業実施におけるノウハウ集(2011年7月改定案)』
読売新聞教育取材班 2010 『大学の實力 2011』中央公論新社
読売新聞教育取材班 2011 『大学の實力 2012』中央公論新社

※以下に『大学教育論』の方針が定まり始めた昨年度から今年度に至るまでの、学生による授業評価の結果を記載する。現行の授業評価アンケートは PBL 型の授業に対応していないので、すべて自由記述を採用している。

APPENDIX I

〔2011年度の授業評価アンケートの結果〕

1. 一言でいえば異色の講義であり、また、白眉の授業でした。言外の規則・ルールのような縛りにしたがって「それなり」の授業が行われても仕方がない中で、自由に言いたいことを言わせて頂き、率先して先生が「異議」を唱えていくスタイルに魅了されました。また、学生側も、テーマ通りの主体性を発揮できた、よい機会になったと考えます。日頃は、各自の考えを発表する機会は限定的で、しかも学説その他のルールに則った形式上のものと考えます。持論をぶつけ、反応をダイレクトに返してもらえることは、授業という枠を超えて有益だと感じました。とはいえ、私も実際に授業を受けるまでは、その点はわからず選択したのであり、さらにこのようなムーブメントを PR する必要があることを感じました。もっと発表したいナと思う、大変楽しい白熱教室でした。半年間ありがとうございました！（法学部1年）

2. この授業は私にとって秋学期 No.1 でした！自分たちで調べたことに対して、こんなに考えたのははじめてだったし、ほかの人の発表一つ

一つに対してこんなに考えたのはじめてでした。大学生活って何なのか、自分が本当にやりたいことは何なのか、ほかにもたくさん考えました。私の中で少しでも何かが変わった気がします。自分たちが発表する内容を調べたり考えたりしているときに、結局、何が言いたいのかということを考えたときに、少し行き詰まることもありました。でも最後には自分たちなりの結論を得ることができました。このチームでやれたことが本当によかったです。何かこれから行動に移していけたらいいなと思います。(文学部1年)

3. この後期の授業を取って半年間、班を作り、一つのテーマを決め、みんなで調べて発表をするのが終わって、とても有意義な授業だと思います。大学の授業の中では、こんなに自分達が作り上げるようなものはなかなかないし、ゼミなどもあまり履修していないので、とても新鮮で楽しかった。大学から社会に出て行くための自主性だったり、自らの発想やアイデアをグループの中で生かしたりする力が身につくような授業でとても力になりました。(政策創造学部2年)

4. 私は正直、このような授業とは思っていませんでした。最初はどちらがいいのか全く分かりませんでした。しかし、先生の話やLAの話聞き、グループで話し合いをしていく中で、この授業で大切なことは何かというのが分かったような気がします。ここで学んだ大切なことをこれからの大学生活に必ず活かし、良い大学生活にしていきたいと思いました。そして、また先生の講義を受けたいと心から思いました。ありがとうございました。(社会学部1年)

5. 普段受ける授業は、先生が学生達の反応を見ずに、自分のペースでなされるものが多く、つまらない授業ばかりですが、この授業ではテー

マ決めやプレゼンを学生主体で進めることができるので、楽しめました。半年間ありがとうございました。(環境都市工学部1年)

6. 実際、私はこの授業を受けるつもりはなく、抽選科目が消せなかったため、この授業を履修しました。私はグループワークなど、他人と接することを嫌う性格でしたが、本当にこの授業でグループワークをしてよかったです。それは、他の人の様々な意見を知ることができ、みんないろんな活動をしているということがわかりました。協力して発表の準備をすることで、人を好きになることができたと思います。さらに、GPA、留学、科目提案など…様々なことを知ることができ、まさに大学をよくしていく、つまり自分が大学の主人公だと思えるような授業でした。今後もグループワークを嫌がらずに、積極的に参加していこうと思いました。(商学部2年)

7. 「大学の主人公はキミたちだ」ということで、自分達の大学を自分達で考え、変えていこうじゃないかという、授業じゃないような授業で、とても刺激的で楽しかった。要望としては、1年間通してこの授業をしたいなと思った。本当に自分たちの考えた大学の変えたい所を、いろいろな所にアプローチして、変える所までやりたかったという気持ちもあった。(法学部2年)

8. 他の授業とはまた違った形式の授業で、新鮮さがあって、とても楽しく授業を受けさせていただきました。それぞれに分かれて好きなことを調べたりすることによっていろんなことを知ることができるし、とても自分の為になるような授業でした。この授業を通じて、少しは自分の視野が広がったのかなと思います。後輩にも推薦したいと思います。(法学部1年)

9. グループワークで、年上ばっかなので縮こま

ってしまったので、せめて1年、2年ぐらいは分けてほしかったです。(社会学部1年)

10. こんな感じの授業は初めてで、とても楽しかったです。僕はスポーツクラスで授業を受けることが多いので、一般生とふれあう機会がありませんでした。この授業はグループを作って、みんなで話し合っ一つのことを完成させるということをしてきました。それが他の授業とは違い、とても新鮮な気持ちで受けることができました。半年間ありがとうございました。(政策創造学部1年)

11. 半年間でしたが、ありがとうございました。最初、先生のガイダンスきいて、天才と思ったぐらい、知的な人だと感じました。印象がすごかったです。水曜一限やのに、とても楽しかったです(^u^)。とても良い授業でした。自分の発表も大事ですが、人の発表の方が大事ですし、自分のためにもなります。そこを分からず休む人は少しもったいないと思いました。先生が何個かテーマを決めて、やりたいテーマをグループで奪い合うぐらいの活発的な授業も楽しかったです。僕はとても満足しました。(文学部1年)

12. 先生がFACEBOOK、twitterに参加し、そこで授業外コミュニケーションを取る。もっと言うと、先生とSNSでつながる事を課題とし、おこなった授業への意見を出すことを宿題とするなどしてコミュニケーションを取る機会を増やすようにすれば…いいのかも。(商学部3年)

13. グループワークができて、とても楽しかったです。大学の教室についていろいろと学んでいき、とても楽しかったです。これからも大学を大切にしていきたいです。(法学部1年)

14. 大学教育について様々なことを考えること

ができた。少し大学教育について考えるということで、発表内容がかぶったりしてしまうことが残念で、全班、違う内容を考えるのは難しいと思った。GPAについては、正直、おかしいと思った。アメリカに合わせるのではなく、日本らしさも必要で、GPAについても、もっと学生にわかりやすく説明するべき。評価方法も考え直すべき。(政策創造学部3年)

15. 半年間ありがとうございました。私にとってこの授業はとてもいい経験になりました。授業1回が2000~2500円ということを知って驚きましたが、この授業は3000~4000円くらいの価値があるのではないだろうかと思います。それほど私にとってはタメになる授業でした。なので、特に要望などはありません。半年間、本当にお疲れさまでした。(法学部1年)

16. この半年間とても楽しかったです。来年度もこのスタイルで授業してもらいたいと思っています。あと、またいつか三浦先生の授業を受けたいと思います。しかし、私個人のお願なのですが、来年は(a)/(b)等の通年スタイルの授業も作ってほしいです。そして1年かけてじっくり研究してみたかったなと思います。(文学部2年)

17. グループワークを様々な学部、学年の人たちとすることができて、とても楽しかった。この授業を履修して、本当に色んなことを知れたし、色んなことを考えるきっかけができたことが本当に良かった。大学教育に関して知識が高まったし、これからの大学生活に活かしていきたいと感じ、また友だちにもすすめたいと感じた。(法学部1年)

18. あっという間で半年間を過ごしたんです。この授業は、他の授業と違って、自分の意見や思いを言えるし、自由なふんいきでよかったで

す。(文学部1年)

19. 各グループ自分達が調べていることについて、もう少し調査時間がほしかった。授業の始まるの時間に委員会などの紹介も良いと思うが、その時間の方が、授業活動自体の時間よりも長くなってしまっている時もあったので、そこを改善してほしい。この授業から大学を変えようという目標はとても面白く興味深かったです。

(商学部1年)

20. 大学教育論は本当にたのしい授業でした。他の授業と違い、グループで協力しないと授業は成り立ちません。また、普段の授業では、自分の気持ちや考えを人に伝えるということが少なく、自分は意見を述べるのが苦手だと分かりました。来年もこのような授業をとり、苦手を克服したいと思います。(文学部1年)

21. 三浦先生の授業は他の授業とは異なり、生徒と教授間のコミュニケーションが上手くとれており、親しみやすく、積極的に参加したくなるような授業でした。ゲストとして、アメリカの教育事情に詳しい人や、その他の有識者を招いて授業を展開していくと、さらに刺激的な授業になったと思う。また三浦先生自身が持っている知識であるとか、体験談をもっと聞きたかったです。(社会学部1年)

22. この授業を通じて、GPAや留学・学校環境など、多くのことを学生目線で知ることができた。人前で発表することの大変さ、伝えることの難しさも実感した。これからの授業の受け方や選択方法を見直し、今後の自分にとって利益となる学生生活をおくろうと思った。楽しかったです。(経済学部2年)

23. まずこの授業を選んでよかったと思うことは、学年や学部が違う人たちからとグループを

組んで授業を進めていくというのは、他の授業では経験したことのないことで、いろんな学部の話の聞けたり、先輩からこれからどういうふうに大学生活を送っていけばいいかなど、貴重な話をたくさん聞いて、すごく貴重な時間で、とても楽しかったです。この授業を受講して、よかったと思うし、他の人にもすすめたいと思いました。(商学部1年)

24. 三浦先生が言っていた「来年はグループを最初に分けて、この授業をすすめる」が、とてもうらやましいです。テーマが最初から決まっていると、次に受ける人たちは、もっと自由に、遠慮なく、新たな個性的なアイデアを出せると思います。しかし、全くテーマもない状態から発表を創るという力を身につけられた私達もとてもいい経験でした。課題探求の授業も含め、一年間ありがとうございました。同じグループの人に自分のぶっ飛んだ発想を伝えたり、自分が折れたりして、いい発表を仕上げる経験ができて、三浦先生に感謝です。個人的にはもっと自由な発想をみんなから引き出すことが出来たらよかったのになと思います。ありがとうございました。(社会学部1年)

25. はじめは“授業評価アンケート”というテーマから何を伝えるかが定まらず、どういう発表になるか不安でした。でも、自分たちの中で結論が出て、それをみんなの前でできて良かったです。自分たちのテーマ以外のことにもすごく興味を持ちました。この授業を受けるようになってから、確実に大学について考えることが増えたとし、大学生活に前向きになったと思います。水曜日1限、眠かったけど、おもしろかった、たのしかったです。今、また、先生の教職概説を受けたら、前とは違った感じ方をするだろうなって思いました。すごくたのしかったです。ありがとうございました。(文学部1年)

26. 私は授業でプレゼンをする機会やグループワークをする機会がすごく少なく、自発的に取り組まないと授業が成り立たないという経験をしたことが少ないので、この授業では学生が主体的となって行動する力が身についたと思います。私がこの授業を受講した理由は二つあり、一つ目はシラバスの内容に書かれていた学生が主体的となって取り組むこと、二つ目は大学の歴史について知りたかったということで、この二つを満たせたと思います。発表が終わってから、毎回、先生のコメントが新鮮で、先生から多くのことを学べたし、また自分から学ぼうという意欲もわきました。この授業を受講できてすごくよかったです。ありがとうございました。(法学部3年)

27. いろいろな学部の人が集まって自分たちでテーマを決め、LAさんがいて、他の科目とはまったく違う内容で充実していたと思う。正直、最初は大学生になってまでグループワークなんかしなくてもよいのではないかと感じていたが、大学生だからこそ必要ではないかと最終的には感じた。先生も少し言っていたかもしれないが、テーマを絞ってグループワークを展開していったら、もっと深くなって良いのではないかと。前の紙にも書いたが、学習意欲が高まったが、期末考査前に、この時期になったら単位のために勉強しているんだなと痛感する。もっとグループワーク的な科目が増えたらよいのにも思うが、それだったら楽をしたいからと、そればかりを取ってしまう人もいるかも…ということで難しい。大学教育論の授業は終わったけど、引き続き問題意識をもって学習していきたい。半年間ありがとうございました。(政策創造学部1年)

28. 発表がそれぞれあっておもしろかった。けどGPAについてが3グループあったので、できればかさならないようにしていくのもいいと

思う。とりあえず単位の基準が知りたかった。シラバスには出席は関係ないと書いていたが…。じゃあ、この授業に出てなかった人、発表きてない人にも単位あげるんですか？LAさんがいるのが良かった。はじめの頃にアドバイスしてくれる人がいるのは心強い。4回生の方が最後に話していたことが印象に残った。1回2000円の授業で、それだけみたら高いとを感じるが、授業で出会う人やサークルなど、4年間を買うと思えば、そんなことはないと言える気がした。まだ1年もたないけど、学祭の委員会に入れて、いろんな人と出会って、話して学祭成功させて、こんな機会を与えてくれたのも、大学やと思うと、授業だけでは決められないなと思った。(文学部1年)

29. 私は4回生で、最初はアクティブ・ウォーカーの皆様(年下)と仲良くできるかなと、とても不安でした。しかし三浦先生の協力もあり、とても良い発表ができたのではないかと感じております。また、4年間でこのような授業は初めて体験しました。とても実践的かつ周りの人たちともコミュニケーションがとれる、楽しい授業でした。本当にお世話になりました。ありがとうございました。私はもう卒業して来年度からは社会人となり、大学には在籍していませんが、もっとこのような授業が増えていけばいいのではないかと感じております。(政策創造学部4年)

30. まず、半期の短い間ですが、ありがとうございました。この授業を履修した理由の一つに、三浦先生の授業なんでもいから一つはとってみると友人に言われたからなのですが、その意味がよくわかりました。理由は他の講師とは違う目線を持ってお話をしていただけることです。もちろん生徒の視点もあれば、もっと広い海外とかを交えた視点など、とても興味深かったです。他の講師の方は、すぐ大学内の話や社会の

話をしたがるので、正直、もう聞き飽きたって感じなんです。本当に他の先生全員に三浦先生の授業を一回受けてほしいと思いました（笑）。あと良かったのは、先生は本当に博識だから、どんなテーマの発表でもわかりやすいフォローを入れていただけたのがとてもよかったです。今回、自分達に学び、考え、発表するという機会を与えて下さったことに感謝しています。次年度も先生の授業を是非とりたいので、そのときはよろしくお願いします。（商学部1年）

31. チームで一つのことを調べて発表する。本当にこの授業の目標とした学生主体の授業だったので、本当に楽しかったですし、自分の力にもなりました。しかも、それぞれのチームの発表を聞いて、学生の思った声を伝える、それはこれからの反映につながると思いました。ただ、自分から手を挙げられなかったのは、学生主体に反してしまったと思いました。教職概説から三浦先生にお世話になって、もう一度、先生の授業を受けたい！友達にもこの先生の授業を知ってほしい！と心から思いました。先生の何気ない経験話が本当に自分の中で何かをかきたてるもので、先生との会話が楽しかったです。できることなら来年も取りたい!!そう思いました。また先生、別の授業、開講して下さい!!（文学部1年）

32. この授業は勉強という感じではなく、楽しく授業を受けられました。今まで考えてもなかったことや、新鮮な意見が聞けて、すごく楽しかったです。来年も、このような、発表などをする授業を取りたいです。（商学部1年）

33. この授業を通じて、たくさんの考え方（視点?）があることを実感しました。/LA のみなさんが、テーマに迷っているときに、いくつかの道順を提示して下さい、何度も助かりました。/教授のプロフィールを配ってほしかっ

たです。なぜなら、「僕は～したことがあるんだけど」と経験談を話されることがありましたが、その経験談をもっと聞きたかったからです。/水曜1限は体に悪い。2限からが良い。/うわべを見るのではなく、裏面も見よう、考えようとする努力が大切なのだと感じました。（法学部2年）

34. この授業は他の授業とちがって、学生同士で交流できるので楽しかったし、大学について知らないこともたくさん知れておもしろかった。ただ、出席をとらないので、チームのメンバーが全然来なくて、役割分担しても結局来ている人だけでやることになって、不公平だと思う。せめて出席はとるべきじゃないかと思う。もしくは2限にしてもらえれば出席率もよくなると思う。個人的に一番印象に残ったのは関大のマークが1000万かけてつくったという話が何気に印象深い。（商学部2年）

35. 抽選で当たって消すことができず、なんとなく受け始めた授業でしたが、グループワークで自分の気になっていたことを深く調べることができたし、他の発表を聞いて、自分が知らなかったことや気づかなかったことも発見できて良かったです。（文学部2年）

36. この授業の良いところはグループワークで進めて行くところだと思います。グループワークによって、それぞれの意見をストレートに聞くことができるからです。（法学部1年）

37. 本当に有意義な授業だと思いました。大学に入ってから本当に無意味だと思ってしまう授業がほとんどの中、こんな有意義な授業を取って嬉しかったです。三浦先生の話は本当にまわりが見えないぐらい集中してしまうくらい、興味深くおもしろかったです。ただ時間が少ないのが悲しかったです。三浦先生の話聞ける

授業を作って欲しいくらいです。(商学部 1 年)

38. この大学教育論という授業は、頭が良いとか賢い人が良いのではなく、誰でも意欲を持てば役に立つ知識が身につくので、素晴らしい授業だと思いました。こういう授業がたくさんあれば大学生活が良いものになると思いました。なので、後輩や友人に勧めたいと思います。近い将来、役に立つ知識が身につくととても良かったです。ありがとうございました。(政策創造学部 2 年)

39. まず私の反省から…。出席率があまり高くなかったことが心残りです。3 回生秋学期、水曜 2 年に教職の授業を入れた、あら 1 限にミウラ先生の例の授業があるぞ、う～ん、どうしよう。何でミウラ先生は 1 限の授業が多いんだろう。朝起きられるだろうか…ええい、入れてしまえっ!! という幕開けで迎えた秋学期でした。ここまでで何が言いたいかというと、水曜 1 限は時間的につらいものがあるので、できれば 3 限とかにしてほしいなというのが一つです(あくまでも希望です)。/次によく本論です。LA さんがにぎやかなのが良いですね。たるたにさんの名司会、さすがたるたにさん☆これから有望な LA さんが発見されるといいですね。/人数については多い! ってというのが最初の印象だったので、この半分くらいになっても良いのでは。そのかわり学生同士の議論を増やしてもいいと思います。/大学教育論の広場のプリントをインフォメーション上などにアップしてほしいです。/先生のコメントがひかえめな気がしました。席が遠いからですかね? やっぱり少人数が良いなー。でも大学教育論とスタスキとは違いますから、そこは事情があるのでしょうか。以上です。半年間ありがとうございました。(文学部 3 年)

40. 大学教育論という授業をとって、1~4 回生

のさまざまな学部の人と出会い、話をすることはすごく刺激的でした。大学になぜ来ているのかななどを考える良いきっかけになりました。楽しかったです。この授業を取るまで、大学の先生とは、すごく近づきたいイメージがあったのですが、そのイメージが崩れました。半年間ありがとうございました。(法学部 1 年)

41. この授業は自分にとってすごくいいものになりました。学生が考えたことや、学生の生の声が聞けたことは、学生である自分にとってためになりました。そして自分も色んなテーマに対して考えることができたのが良かったです。グループワークの中で色んな意見を聞いて、自分の考えと照らし合わせて、また違った考え方ができるのは良かったです。これからの大学生活を見直せるという意味でもいい授業でした! でも出席率が悪かったのが残念でした。(文学部 1 年)

42. 授業を通じて、LA はもちろん、他学部生と交流し、考動をすることで、新しい考え方を得られたので、これからの授業はもちろん、目の前に迫っている試験にもやる気がわきました。授業目標(目的)を達成できたのでは、と思います。来年もこの授業はあるということなので、今学期のプレゼンから得た新たな学生の提案を来学期の学生に引き継いで、より掘り下げてもらえれば、授業の枠を超えて実現に進むと思うので、是非そうなれば良いと思いました。短い間でしたが、4 回の卒業される LA の方、萌先輩をはじめ、ありがとうございました。また大学生を頑張っていきます。(法学部 1 年)

43. グループで決めた事柄について深く調べて、みんなで議論する。関大に入学して初めてこのような授業を受けて、すごく刺激を受けたし、自分の中で成長できたと思う。また、関大の現状、日本の大学の現状、少ない情報だけど海外の大

学の現状、この授業を受けて色々な事を知ることができた。今まで適当にやっていた授業評価アンケートも今ではしっかり答えるようになったし、自分が、今、関大のために何ができるだろうと真剣に考えた夜もあった。結局、答えは見つからなかったけど、残りの3年間、この授業を受けたことで変わってくると思う。この授業は今の自分、未来の自分のためになった。間違いない。半年間お世話になりました。(文学部1年)

44. この授業を受けて、まずグループが3回生と4回生の先輩方と同じグループになれて、話していくうちにいろんなことが勉強になりました。上回生と同じグループは初めてだったので、パワーポイントの作成や資料の集め方など、やはり上回生、すごく慣れていたし、パワポの作成のうまさは勉強になりました。それだけでもこの授業とった価値はあるんですが、関大生の喫煙についてのことが分かり、普段何気なく設置してある喫煙BOXについて知れたのでよかったです。果たして関大は5年以内に完全禁煙になるのでしょうか…。また他のグループの発表を聞いて、GPAとか、大学のことについてよく知れました。遅刻ばかりしてすいませんでした。この授業1限以外にしてほしいのが、唯一の私の要望でございます。三浦先生、半年間という短い間ではありましたが、お世話になりました。この授業楽しかったです。ありがとうございました。(文学部1年)

45. この授業を受けたのは、正直、時間割の関係だったが、授業が終わった今、とても意義のある授業だったと思っている。私は今でも大学の教育について、あまり考えたことがなく、大学側から与えられるものをただ受けている、受け身の体勢でしかなかった。そこに特に疑問を抱くこともなかったのだが、授業内で各グループの発表を聞いたり、学生団体の代表の方の話

を聞いて、それではダメなのだと気づいた。学生が今の制度や環境に疑問を持ち、それを解決もしくは緩和させる方法を考え、行動しなければ、よりよい教育制度は作れないということが分かった。今回の授業で学んだこと、疑問に思ったことを授業内だけで終わりにせず、これからも考えていきたいと思うし、また、他の人にも伝えていきたいと思う。半年間、楽しく授業を受けることができて、本当によかった。ありがとうございました。(法学部1年)

APPENDIX II

[2012年度の授業評価アンケートの結果]

1. 私はこの授業で関大の改善すべき部分を多く見つけることができたと思う。一人一人の意見を尊重し合える授業に初めて出会えた。この授業は一人でも多くの学生に受講してもらいたい。

2. 学生の「素晴らしい大学生活を送りたい」という熱意、思いに触れることができ、大変、良い刺激を受けました。その点が、この授業の最大の魅力だと思います。また、違う学年と交流できる機会は大変貴重だと思います。私自身、1回生の時に全学部共通科目で尊敬できる先輩に出会い、3回生になった今でもお世話になっています。そういったつながりができる機会は少ないと思うので、ぜひ、継続してほしいです。

3. 「学生が主体となる」ことを考えていく授業で、受け身ではなく、自ら動くのはとても新鮮で楽しかったです。先生からは色々な話を聞いて良かったです。後輩にオススメできる授業でした。

4. この授業は私にとって、とても新鮮なものでした。他学部、他学年の人たちとの交流がある唯一の授業でしたし、この授業があるまでは大学の現実とイメージのギャップや不満などがあ

りながらも漠然と大学生活を送っていましたが、学生側からのアクションを起こす大切さも学びました。これからはまさに「大学の主人公」として、改善すべきところは改善させて大学をより良い場に変えていきたいです。

5. GW。『大学教育論の広場』の先生のコメント。全員分あり、とても大変だったと思う。一般科目でGWができる授業は初めてで、とても新鮮だった。ディスカッションやGWは高校ではあまりなく、これこそ大学の授業という感じがした。

6. LAさんが司会などをして学生がこの授業を引っ張っていったことで、この授業の名前通り、学生主体の授業となれたことがよかったと思います。

7. 自分で考えて自分や大学生活を良くしていくとする積極的な取り組みが楽しかったです。グループワークでは協力して調査ができました。

8. この授業はディスカッションが中心で、他にこのような形式の授業はあまりなく、貴重な授業だと思います。特に、学生アシスタント中心で授業が進んでいく点が良いと思います。ぜひまた受けたいですし、友人にもすすめたいです。頭をフルに動かす楽しい時間が過ごせました。

9. 少人数制であり、グループワークもあるため、自らが授業に参加しているという感覚が他の授業とは比べものにならないです。学生が主体的に行動することがこの授業ではとても磨かれるので、この授業をレギュラー化してほしいです。

10. 授業を受けて、私の大学人生をもう一度見直すことができました。大学がよくなるように考えている人があつまって、話し合うことができたことに感謝しています。とてもたのしく授業ができたし、良い経験になりました。

11. 大学教育論という授業は大学に入って初めて興味を持って、楽しい授業でした。もっと色んな事を学びたかったと少し後悔してしまっている自分になさげなく思えます。このような自分から動く事の出来る授業が増えていけば、大学の授業も少しよくなってくのではないかなと思いました。今後、この授業がこれから入ってくる新入生たちに良い刺激を与えてくれると信じているので、これからもこの授業は残ってほしいです。

12. LAもたくさんあり、良い意味で日本の大学の授業と違っていたと思います。この授業で寝ている人はほとんどいなかったし、学部や学年を越えて自分たちの学生生活や関大について真剣に考えていたと思います。海外に行って帰ってきて、こんな授業が日本にあるとは思ってなかったし、単位上とった授業でしたが、とても有意義でした。先生の知識やゲストスピーカーから得られることもとても多かったと思います。

13. 大学の主人公である私たち学生が、自ら調べ、他の人と意見を共有することができて、大変充実した15週でした。そして何ができるのか考え、実行に移していきたいなと思います。ありがとうございました。

14. この授業は自分の意見を発信したり、他のチームの意見を聞いたり、その中でたくさんの人とディスカッションして、自分の受けたい講義は本当はこんなものなんだなあと思うぐらい、この授業がすごく大好きで、毎週楽しみにしていました。こんなスタイルの授業が増えてくれたらいいのになあと思いました。

15. 大学のシラバスとか知らないことが多くて、知るのがおもしろかったです。

16. 大学内の、これまで気に留めなかった事にまで興味を持てたところ。自分とは違う視点がこんなにあると実感できるところ。先生の熱意！

17. 海外の授業に似ていた授業でした。自分の考えていることが大学という大きな組織に伝わるということにすごく感動しました。また私も違う授業で LA をさせていただくので、すごく勉強になりました。

18. 自分たちのやったことが実際に関西大学を変えることにつながるの、こんなに受けていて意味があると思った授業はないです。

19. 他学部・他学年の方と多く関わる機会を持てたこの授業は、とても自分にとってよいものとなりました。LA の方もすごくしっかりした方々、フレンドリーな方々で毎回の授業がすごく楽しかったです!!

20. グループワークを通して自分たちが大学をどういう風によくできるか、考えられて、本当に有意義な時間を過ごせました。こういった自ら学べる授業はもっと増えてほしいと思います。

21. いろいろな学部・学年の人たちと出会えて、また、自分の知らない話を聞いたりできて、とても刺激になって良かった。グループワークをすることで、その準備、また自分の意志や考えがないと成り立たないと知ることが出来ました。すごく良い経験になって良かったです。

22. とてもおもしろい授業だった。先生が物知りで、いつもいろんな事を教えてください。授業内容も、学生側が動かないと成り立たないような学生主体の授業で、今の日本の大学には足りないものがここにはあると思いました。

23. 授業を通して、多くの知識を身につけられた。それはグループワークで発表形式だったので、とても良かったです。

24. グループワークをしたことで、様々な人々の意見を聞き入れ、交換し合えた。とても良い経験になった。私は卒業するが、後輩たちにはよりよい学生生活を過ごしてもらうために、関大がこれまで以上に良くなってほしいと思っている。

25. この授業は他の講義と違って、グループディスカッションを行ったり、プレゼンテーションを行って、それを聞いて質問し合ったりなど、自分達が主体的に臨めるものだったので、とてもためになる授業でした。

26. 今まで受けた授業の中で一番楽しくて為になりました！この授業を受けて、関大をもっと良くしようと考えている人がたくさんいると知り、自分も、よりいっそう思いました。この授業が一番楽しかったです!!

27. 一年間、大学で色々な授業を受けてきた中で、この大学教育論が一番楽しい授業でした。他学部・他学年の人とすごく仲良くなれるし、自分達の大学生活を考え直し、見つめ直すことができました。色々な学部・学年の人の意見を知れるので、知識も広がって、すごく良い経験ができた授業でした。

28. 自分たちの通っている、4年間過ごす大学生活をどうすればよりよくできるか、“こうしてほしい”だけでなく、“こうしよう”など、自分から提案をし、真剣に考えることができました。“こうすれば”ではなく、はじめから自分で考えていくことがよかったです。

29. こんなに自分が参加できる素晴らしい講義は今までに受けたことがなかった。この授業を受けて、調べる力もついたし、ひいては就活に有利になる能力を身につけることができたと思う。また受講したいです。

30. ディスカッションが苦手だったので、毎週通してディスカッションをすると、最初の方より積極的に発言できるようになりました。

31. 自分達が主体の授業がよかった。他の学生の意見や考え方のおかげで、すごく刺激されたので、すごく楽しい授業でした。

32. 全体的に、他の授業と違って、LA さんとかも手伝ってくれたり、普段、交流がない人たちの交流ができるからよかった。

33. この授業は、今まで受けた授業とは違い、学生主体で本当に楽しいものでした。

34. 自分が通っている大学のシステムや大学自体について、議論するような講義は初めてで、今まで何となく、そして楽な授業ばかりを履修していましたが、この講義を受けた事によって、改めて講義の大切さを学びました。

APPENDIX III

第2回授業

<p>〔授業内容〕 グループごとにテーマ設定する</p>	<p>〔今回の重点〕 できるだけ、いろんなグループの話を聞いた。</p>
<p>〔活動内容〕 LA の自己紹介</p> <p>先生からのご講義—大学の起源—を聞く</p> <p>グループワークのファシリテーション—テーマ設定—</p>	<p>〔具体的内容など〕 教育実習における体験談を交えて話をした。しかし肝心なことを伝えられていなかったで、まだまだ甘いと思った。話す内容は直前までに頭の中にリストアップ。まとめと流れ確認。</p> <p>LA も一緒になって聞いていた。途中、遅刻者が入室してきたので、席の指示とプリント配付をおこなった。遅刻者の対応は、ある程度、授業回数を重ねたら、後輩に任せてもいいかもしれない。</p> <p>できるだけいろんなグループの話を聞くことに努めた。これまでの自分は、ある特定のグループにしか焦点を当てておらず、全体を見る視野を持てていなかった。または先輩方に任せていた。今期は授業全体の把握に挑戦したい。そのためには、授業内で情報収集、授業外で情報整理。</p>
<p>〔所感〕 前回、授業に出られなかったで、遅れを取り戻す。課題テーマに関しては、毎年、同じようなものが出てるので、新鮮さやタイムリーな話題が出てきてほしい。</p>	

第3回授業

<p>〔授業内容〕 LA によるプレゼン・グループワーク (自分達のテーマについて)</p>	<p>〔今回の重点〕 みなさんがポジティブになるプレゼンを心がけました。</p>
<p>〔活動内容〕 LA 竹村祐哉からのプレゼン 「大学教育論に参加しているみな</p>	<p>〔具体的内容など〕 学生のみなさんに、この学生生活を自らを主人公とし、ポジティブに、アクティブに、そして主体的に動いてほしいと</p>

さんへ」—みなさんは主人公—	いう願いを込めてプレゼンをしました。もう少し、まとめを深めるべきでした。途中から一方向の話になっていたのも、双方向のやりとりを通して、みなさんと一緒に深めるプレゼンを目指します。まだまだこれから。日々成長！
グループワーク：前回の話し合いやテーマについて再検討	I. P. E. T. さんのグループに付きっきりでした。体育会系3人の男性と、おとなしい1回生の女性の班。みなさん、少しギャップを感じていたのも、話し合いを四人全員にリンクさせることに努めました。「～学部はどうですか？どう思われますか？」「4回生の立場として、経験はありますか？」等々。
〔所感〕 昨年は先生に対話力をつけようと言われて反省していました。今年はねらい通りのことをしてくれたとのお褒めの言葉をもらいました（少し成長を感じました）。	

第4回授業

〔授業内容〕 自分史年表作り by THINK×ACT	〔今回の重点〕 学生の感想に対して、授業中・後にレスポンス返しました。
〔活動内容〕 自分史制作の説明—T×A さんから 自分史制作（個人ワーク）20分 自分史発表（モデル）—ACT さん 自分史共有（G.W.）30分 本日の感想	〔具体的内容など〕 本日は LA 半分、参加者半分の気持ちで臨みました。自分史については T×A さんのメンバーの方がよく知っておられるので、一歩下がりながらもフォローすることを心がけました。一つ反省点があります。自分史を書けていない人の指摘を T×A さんから受けました。教室全体を巡回していたにもかかわらず、気づけずにいたことを反省します。観察ということに重点を置きすぎて、学生への手助けに力を入れられていなかった。全体を把握しながらも、個々への必要な支援ができるようにしていこう！
今日は空いている時間を見つけて、前回のプレゼンに対する学生のコメントにレスポンスを返していました。本人に直接話すことで、毎回の感想を見てくれていると知ってもらおう。	学生からのコメントも一方向になってはいけないと思います。LA と学生の双方向の対話が授業を盛り上げていくと考えます。三浦先生が Facebook に「広場」をアップしてくださっているので有効に使っていこう！
〔所感〕 今日の自分史制作では、人それぞれ、自分の過去の振り返り方が違うことを知った（人生の上がり下がり線から書く人、人生のポイントを書き込んでから自分史に臨む人、人生のポイントを点で打ってから線にする人）。	

第5回授業

〔授業内容〕 Lin:KU の紹介／科目提案学生委員会のプレゼンとワーク	〔今回の重点〕 Lin:KU や科目提案委員の人たちと話し、サポートした
〔活動内容〕 Lin:KU さんのアンケートの配付や回収のサポート：アンケートの回収方法や時間などを Lin:KU さんと	〔具体的内容など〕 説明している時間やアンケートの記入時間に余裕があったので、アンケートの配付を手伝い、また回収について相談し、その後が円滑に進むように働きかけました。

<p>相談しました</p> <p>科目提案学生委員会のプレゼンをサポート</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業前に場づくりや本日おこなうことなどを共有し、お互いが動きやすいようにしました。 ・ワークの時、学生達が挙げた科目提案を深めることに努めました。 ・発表グループの推薦 	<p>今日の LA の立場は、進行役でもまとめ役でもなく、サポート役だと考えたので、提案委員の方々のワークを活性化、深化させることに努めました。もっと他の LA さんも話し合いの時間を設け、全体理解の上で授業が進めば、より充実しただろうと考える!!→積極的に関わっていこう。自分はその間をつなごう！</p> <p>できるだけ多くのグループをワーク中に見て、話した中で、グループを紹介しました。教室全体を把握するトレーニングになりました。</p>
<p>〔所感〕 招待されて授業に来た方々は、少しの不安は緊張を抱いているので、LA が積極的に働きかけることが大切。</p>	

第6回授業

<p>〔授業内容〕 LecKU のプレゼンとワーク/グループワーク（発表に向けて）</p>	<p>〔今回の重点〕 LecKU のプレゼンをフォローしました</p>
<p>〔活動内容〕 本日の授業内容をホワイトボードに記した</p> <p>遅刻者へのグループワークのフォロー</p> <p>発表に向けてのスケジューリング</p>	<p>〔具体的内容など〕 学生は、今日、何をするのか、全く知らずに受け身の形で授業にやってくる。そんな人たちが一目で見通しを持ち、イメージを抱けることで、少し主体的になれると考えます。</p> <p>グルーピングが終わっている、またはグループワークが始まっている状況の中で、遅刻してきた学生に対して、どこのグループが適当か、入ってもよいかなどを考えながら対応しました。また、今までの内容や、今からやることなども伝えました。</p> <p>LA だけでこれからのスケジューリングが出来たことは大きな価値のあることだった。先生ともしっかりと共有し、学生にも公平に打ち合わせができたことも収穫である。私は何も声かけもせず、ただ手帳を持って二、三人に話しかけただけだったが、ほとんどの LA が集まって協議へつながったので、後輩に任せることができました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何もかも自分でやろうとせず、自分が他者に頼れるようになるう。 ・後輩に活動の場を自然に見つけてもらえるように。
<p>〔所感〕 来週から本格的にプレゼンに向けてのワークが始まるので、LA も発表に向けての見通しを持ってファシリテーションしよう！</p>	

第7回授業

<p>〔授業内容〕 Muster-Peace のプレゼン・ワーク/発表に向けてのテーマ設定と役割分担</p>	<p>〔今回の重点〕 時間を常に意識し、全体に働きかけた</p>
<p>〔活動内容〕 Muster-Peace さんが刷ってほしいプリントを支援ステーションへ持ちこみ、プレゼン準備をしました。</p>	<p>〔具体的内容など〕 教室に早く来ることで、プレゼン者のフォローや発表に向けての準備が出来るというメリットを今日改めて実感した。早く来ている以上、何か意味あることをやろう。</p>

<p>プレゼン時間について、先生に尋ね、Muster-Peaceの方に助言しました。</p> <p>テーマ設定に向けて LA の意識統一をおこないました</p> <p>前回までのグループごとの進捗状況が分からないグループの支援。第2、3回のプリントを提示、助言。</p>	<p>Muster-Peace の人が時間を気にされていたので、先生と相談し、多少、延びても大丈夫だということを伝え、気兼ねなく発表をしてもらうように配慮した。こんな小さな心配や疑問を解消することも LA の役割。</p> <p>時間がない中で、今日中にテーマを設定しなければならなかったため、LA みんなで受講生に働きかけられるように意識付けをした。ちょっとした声かけで授業が上向きにいく。</p> <p>受講生の立場になって考えると、グループでの話し合いは久しぶりで、テーマ設定が難しいと判断したため、フォローを加えました。少しは役に立ったようです。</p>
<p>〔所感〕</p> <p>LA もいろんな方のお話から学ぶことが多い。プレゼン中に学んだことを学生と共有することが役割かな。／学んだことを深くできるように、学びの活性化を。</p>	

第8回授業

<p>〔授業内容〕</p> <p>発表に向けてのグループワーク</p>	<p>〔今回の重点〕</p> <p>12 チーム中 10 チームに対して、授業内に働きかけた</p>
<p>〔活動内容〕</p> <p>本日の授業内容に関してホワイトボードに記した：「いよいよ発表に向けてのグループワークです。外へ出て活動されるチームは先生か LA に一声かけて下さい。10:25 までに戻ってください」</p> <p>グループへテーマの確認と見通しの相談</p>	<p>〔具体的内容など〕</p> <p>前時と同様、本日、受講生がおこなうことを教室前方のホワイトボードに記、授業に入りやすいようにした。しかし、左記の書き方だと、外に出ることを強調しすぎていて、それ以前の話し合いや打ち合わせの重要性を欠いてしまっている。各グループの進捗から考えて、強調すべきはテーマの再考や調査方法などだった。</p> <p>各グループにテーマを確認し、進捗状況を把握しようとした。しっかり進んでいるグループが少ないにもかかわらず、危機感があまり感じられなかった。これは LA がもっと働きかけて、ペースをはやくする必要がある。今日は LA も少し甘いように見えた。経験者が他の LA に助言し、共通認識の上で授業を進めていくことだ。また外から帰ってきたグループに結果報告を聞くことも大切。</p>
<p>〔所感〕</p> <p>後輩に伝えられることは何か。また、どのように伝えたら良いか、難しい。ここにも挑戦です！</p>	

第11回授業

<p>〔授業内容〕</p> <p>プレゼン2グループ</p>	<p>〔今回の重点〕</p> <p>司会を務めながら、他の LA さんと協力した。</p>
<p>〔活動内容〕</p> <p>プレゼンに向けての準備 —発表順番設定・タイムプランニング・プレゼン説明</p> <p>プレゼンの司会</p>	<p>〔具体的内容など〕</p> <p>プレゼンがスムーズに進むように、事前にやっておくべきことをおこなった。しかし、先生に指示されて行動に移したこともあったので、昨年を思い出して事に当たられてなかったと思う。経験者として、しっかりプレゼン全体をメイクしていこう。</p> <p>他の LA さんにタイムマネジメントやサポートをしてもらえたので、司会のみ集中しておこなうことができた。しかし、</p>

	時間配分という点では、少し余裕を持ちすぎた。もう少し時間に関してはシビアにいこう。最も大切なことは学生の発表を充実させること。
〔所感〕 司会はやはり楽しい。司会とは、みんなの笑顔のきっかけづくりをできることだ。	

第12回授業

〔授業内容〕 3グループの発表	〔今回の重点〕 今日は他のLAさん（後輩）に任せました
〔活動内容〕 発表の準備 ・ホワイトボードに発表の流れを示す ・発表グループのUSBデータを集める ・司会LAさんと時間や手順を相談 プレゼンの中で内容を深めるために、質問をしました。 (教務の職員さんが見に来られていたので)	〔具体的内容など〕 ☆今日は司会も他のLAさん、とりわけ後輩のLAさんがやることになっていたので、私はあまり出過ぎず、サポート役として臨みました。 ☆この「大学教育論」はLA数も多いので、全員が様々な経験を積むことが大切だと考える。そこで先輩や経験者が前に出すぎると、他のLAさんの成長はない。経験者は、その経験の場を創り出し、与える立場がいいのかもしれない。それこそ“経験を活かす”ということだと考えた。 ☆大学の職員さんが大学教育論の授業に来られるのは減多にならないことなので、チャンスを活かすために質問しました。発表者のプレゼンを高めることができたのではないのでしょうか。
〔所感〕 今日一番に感じたこと。“発表者のプレゼンの充実”に尽きる。時間の確保・ファシリテーション・タイムキーパー・事前準備、これらをLAが促進する。	

第13回授業

〔授業内容〕 3つのグループによる発表/LAで次回以降の相談	〔今回の重点〕 今回は司会のサポートや他のLAの場作りをしました
〔活動内容〕 プレゼン→質疑応答→三浦先生からコメント→発表者から一言 LA次回（あと2回）の司会、発表グループ、進め方などを話し合っただ。なかなかおもしろい討論になりました。	〔具体的内容など〕 ☆今回も司会を担当しなかったもので、マイク補助や質問者、プレゼン準備などにまわりました。なかなか忙しいですね。 ☆学生の中から「？」やコメントがあまり出てこない。これを自然に出すためにはどうすればよいか。元々の授業に臨む姿勢に関わるが、では全員の意欲が低いのか、そうではない。必ずLAにも何か変えられることがある。例えばアイスブレイクを導入しておく。提出用のプリントに書いている人を見つけて当てる。グループワークをして、深めてからにしてみる。など、色々、手立てを考えることに意義がある。 ☆発表者の一言は、みんなへの感謝の言葉や、ふりかえりなどを言うことによって、初めて意味を持つ。この時間は本当に気に入っています。
〔所感〕 来年のために何を残せるか、あと2回、最後までしっかり全うします！そして来年度に活かす！	

第14回授業

<p>〔授業内容〕 2つのグループによるプレゼン・グループワーク・全体シェア</p>	<p>〔今回の重点〕 あと2回なので、後輩のサポートにまわりました。</p>
<p>〔活動内容〕 2つのグループのプレゼンの準備、サポート ・どんな発表内容か聞く→司会者と共有 ・パワーポイントを前のパソコンにコピーする ・発表時間の把握→LAと共有→タイムテーブルへ ・グループメンバーと話し、リラックスさせる 発表の中から質問や課題、感想をグループ内で共有し、設定するワーク ヘファシリテーション</p>	<p>〔具体的内容など〕 考えると、発表前にすることって、多いですね。でも、どれもが意味あることだと思います。より良いプレゼンへのサポートは、やり過ぎでも構わない。私たちが思っているより、発表者は緊張しており、不安でいっぱいである。一学期の中にプレゼンをする機会はそう多くないものと考え、みなさんにとって、この経験は大切になるだろう。発表者の成長のためのサポート…何ができるかな？ 質問が浅かったり、特に何も思いつかないグループがあったので、「まず発表内容は理解できましたか？」と問うと、いまいち分かっていなかった、「どのへんが？」「どの言葉が？」と問うと、少し出ました。大切なのはプレゼンを聞いているときに、常に客観的に眺め、「？」を投げかけること。そして、都度、メモを取るのだと考える。</p>
<p>〔所感〕 あと一回。最後までモチベーションを崩さずに臨む、受講者に笑顔で帰ってもらえるようにしよう。名残を惜しんでもらえたら、それなりに収穫がある!!</p>	

第15回授業

<p>〔授業内容〕 2つのグループのまとめ・ディスカッション・まとめ</p>	<p>〔今回の重点〕 今日もサポートとして、動き回りました</p>
<p>〔活動内容〕 2つのグループのプレゼンの準備（流れをホワイトボードに記す。発表順決定。LAによる話し合い） ディスカッション内容を発表する際、コメントをホワイトボードに記録するLA さんのサポートをしました</p>	<p>〔具体的内容など〕 今日は、2回目のディスカッション方式を採り、LAも慣れてきたのでスムーズに行うことができた。また、吉本君がワークシートを作ってくれたことや、LA同士で流れの見直しができるおかげでもある。改めてLA同士の結びつき、横のつながりが大事だと考えた。来期はもっと授業開始時や、その前からしっかりとその準備をしよう。 LA一人で記録できなかった場合の補助として、メモをしたり、コメントを覚えたり、助言をしたりしました。受講生から見やすいようにと心がけました。教室の後ろか前の、どちらのホワイトボードに書こうか、迷いました。先生の立ち位置からすれば前ですが、質問者の起点から考えれば後ろでした。</p>
<p>〔所感〕 今年も大学教育論が終わりました。あと一学期しか関われないことを考えると、来年度への志が沸いてきました！</p>	